



# オレンターノPRESS

©NORICO/Orentano



Ipppei  
Hada

Tomoya  
Yokoyama

HidamariCafe 石橋 常行氏

Shinya  
Kawashima



## CONTENTS

### INTERVIEW

監督 上野 優作 CAP MF10 庄司 悦大

### Writer's eye

ライター 後藤 勝

#### 特別企画

U-15監督 川島 真也 × DF26 羽田 一平 × FW27 横山 智也

天皇杯 JFA 第103回 全日本サッカー選手権大会・オレンターノツアー 報告

#### 新シリーズ

支える人① コミュニケーション 野崎 信行

地域貢献活動・HOME LAST 3GAMES



# Writer's eye

ライター目

後藤 勝  
Masaru Goto

## 2023シーズンも折り返し地点を過ぎた今 活躍中の4選手をライターの目線で独自解析



1 GK 茂木 秀

J3開幕戦から第6節までは出番がなかったが、第7節のFC大阪戦からFC岐阜のゴールマウスを守り、こまで15試合にフル出場を続けている。初登場の第7節は0-1の黒星スタート。ただしシュート7本を被弾しながらもセーブは5本あり、パスも24本中21本がつかまって攻守にわたりチームに貢献していたことがわかる。第8節と第9節は4連敗期間の後半で2失点を喫したものの、一転して第10節と第11節は無失点を達成した。守備組織をコンパクトに保って被シュート数を減らしつつ、シュートセーブ数を第8節から第11節まで3本に維持したことで成績が好転した。上野優作監督はフィールドプレイヤーを統率するコーチングや攻撃の組み立てに関わるパスなど様々な役割をゴールキーパーに求めているが、最大の仕事はやはりシュートストップ。身長195cmという類まれな巨躯を操るゴール前の守備がストロングポイントであり、その活躍が度々敗戦のピンチからチームを救ってきた。今後は難しい被シュートの場面ですすばい反応で止められるかなど、より高いレベルの課題を克服していきたいところ。ポテンシャルは高く、まだまだ上限は見えていない。



40 MF

Ryu KAWAKAMI

S/C相模原の2シーズンではほとんどの試合でボランチとしてプレーしていたが、今シーズン蓋を開けてみると主戦場はなんとセンターバック。開幕戦では途中出場だったが、センターバックに負傷者が多いことで第2節から同ポジションで先発したところ、これが嵌まった。以後、第21節までのリーグ戦20試合で、センターバックとして不動の地位を築いている。上野優作監督が志向するスタイルはモダンフットボールの標準に近いもので、足もとの技術があり、ボールを失わずに保持し、攻撃の起点となる正確なパスを繰り出せるセンターバックが必要不可欠。川上もその役割を兼ねるところまでは構想されていたが、まさかほぼセンターバック専任になるとは思っていなかっただろう。しかしボランチらしい技術と球際に強い守備はセンターバックでも活かされていて、現在のところ不安要素は感じられない。それどころか落ち着き払ったメンタリティは守備のポジションにぴったりで、パスを出せるセンターバックとしての地位を確立しつつある。偶然の発見に近いディフェンダー川上の誕生だが、この男が最終ラインに君臨する可能性、岐阜の試合運びはこれからも安定を続けるだろう。

キャンプ中はサイドバックでもテストされていたが、昨シーズンまでFC岐阜では主にボランチを務め、10代ではサイドハーフでプレーしていた。今シーズンはどこで起用されるのかと思いきや、開幕戦では4-3-1-3のインサイドハーフで先発し、途中からは左サイドバックにポジションを移すマルチプレイヤーぶり。4-4-1-2となつてからは庄司悦大とコンビを組むボランチでチーム状態を安定させ、5月から7月にかけてのリーグ戦7戦無敗に繋げた。柏木陽介の復帰以降は右サイドバックでプレー。ただしボールを持ったときにはボランチの高さまで進出し、比較的自由にプレーを選択出来るという得意な役割を与えられている。ボランチの時期と変わらず攻守にはタフな力強い働きが原動力となっているのはタフな肉體。FC東京U-18在籍時にはユースの試合とJ3の試合(2種登録でFC東京U-23に参加)の二日連続での試合も日常茶飯事で、もともと長時間の運動に対する耐性があった。攻撃的な選手ではあるが激しい守備もこなし、長い距離を走れる技巧派として、チームに欠かせない一員になっている。



45 FW

Charles NDUKA

今シーズンのリーグ戦全23試合に出場し、前線の軸となっている。開幕当初の3トップから2トップにフォーメーションが変わってもセンターフォワードとしての役割は変わらない。スピードがあつて前からプレッシャーをかけられる選手はほかにもいるが、長身を活かして浮き球のターゲットとなつたり、ボールを懐に収めて時間を稼いだり、複数の役割をこなせることが、先発で18試合起用されている要因だろう。とはいえ得点力が無いわけではない。昨シーズンは1779分間出場して2得点と苦しんだが、今年はJ3第23節までに1,503分間出場して6得点と、Y. S. C. C. 横浜でデビューした2021シーズンの1,748分間6得点を超えるペースとなっている。特に第18節FC今治戦でのゴールはわずかな隙を衝いてネットに突き刺す精度の高いもので、得意の形に嵌まれば美しいシュートを決められる実力があることを証明した。今後は現在のように前線でチームに貢献する仕事をこなしながらも、今治戦のように左足を振り抜くストライカーらしい得点を増やし、大黒柱になつてほしい逸材だ。



14 MF

Yoshiatsu OIJI

生地 慶充

# INTERVIEW



Yusaku UENO

我々がボールを保持しようとしているのは、それによって多くの人数が相手陣に入っていく、厚みのある攻撃が出来る。これが一番の理由です。加えて「攻撃は最大の防御なり」という言葉がありますが、ボールを保持することによって相手を我々自身のゴールから遠ざけることが出来ます。これも大きな目的のひとつです。  
さらに言えば、このスタイルに取り組むことにより選手に成長してもらいたい。ボールを持ち、いろいろな判断があつて相手陣に入っていく、その過程でいちサッカー選手として成長してもらいたい思いがあります。  
この半年間で選手は非常に伸びていると思つています。やれることが増えてきていますし、まだまだ求めなければいけないんですけど、攻撃時に中間のポジションでボールを受けてターンすることも出来るようになってきていますし、カウンター時にどういう風に走っていくかというふうな、いわゆるオフザボールの動きも、だいぶ出来るようになってきています。個人戦術、グループ戦術を含め、攻撃の部分では色々出来るようになってきていると思います。ビルドアップでもスペースを見つけて斜めにボールを入れていくとか、ピッチ上の空間を把握出来るようになってきていると思うので、最初の頃よりも個人戦術が上がり、周囲を見ること

出来るようになったと思つています。  
特に8月に入ってからは現実的に勝ち、いかに点を獲るかというところにフォーカスして、選手がよく反応してくれたなと思つています。その反面、自分たちがボールを保持して相手陣で崩して勝つというところを出せなくなつてきているということもありました。今はまだ、ある方向へ舵を切るのを繰り返して欲しい、ということが出せないかというところを繰り返して欲しい、という風に舵を取るかがすごく難しいと思つています。  
5得点を挙げた第23節の長野戦での点の獲り方はボールを保持して前進するやり方とはちょっと掛け離れたものだったので、目指すところは違うんですけど、ただ、今はすばやく攻めることによって結果が出ているので、そこを大事にしたいと思つています。  
スペースを見つけてオフザボールの動きをよくするには、周りを見れるところがスタートです。すばやく、すつと言いつつ続けてきたことが向上して、現在のすばやくい攻撃にも活かしているのかなと思つています。ただカウンターに関しては今シーズンだけの取り組みではどうはいかないんじゃないかな、と。そこは昨シーズンまでの蓄積や選手が備えている力強さや鋭いカウンターに繋がっているのではないかと思つています。  
秋から開幕までは、やることを変えずに精度を向上させること、判断を間違わないということがテーマになってきます。たとえばターン出来るのにターンしないとか、2対1を作つて有利なほうを使えばいいのに使わないとか、そういう判断をよくしてさらにすばやく出来るようになっていけば、よりレベルの高いチームになっていくと感じています。そういう判断力の面で選手が成長していくところをみなさんに観ていただくと嬉しいですね。



監督 上野 優作

## 攻撃でも守備でも 自分たちから仕掛けていく 姿勢を観てほしい



Yoshihiro SHOJI

今までだったら自分を中心になってボールを動かしていくチームが多かつたんですけど、(昨年二度目の)岐阜に来てからは、自分がボールをそんなに触らなくてもいいのかな、ということを感じるようになってきました。もちろん、自分がボールを触ることによって勝利に近づくとすれば、チームとしても自分にとつてもいいことだと思つてんですけど、必ずしもそうではない。自分が活きなくても、周りの選手が活き活きとプレーしてくれたり、やりやすいのであれば、自分がいる意味があるのではないかな、と。周りの選手がやりやすいように、昨シーズンのように考えています。  
たとえば、味方のセンターバックが前に出てきたら、そのカバーをすれば、センターバックの選手はよりプレーしやすくなるでしょうし、同様にサイドバックのところにも少し戻つてあげれば、サイドバックの選手も出ていきやすいだろうと思つています。攻撃面では、以前であればもっと下がつても自分でボールを受けて自分主体でどうにか崩そうというのはいくらも考えていたんですけど、それは場合によってはチームのバランスを崩すことにもつながるし、必ずしもいいことではない。しっかり立ち位置に立ってボールを動かしていこうというチームがめざしていることと、自分のやりたいことをしっかりと合わせていこうと思つています。



MF 10

キャプテン 庄司 悦大

昨年には本当に苦しくてなかなか勝てなかつたんですけど、サポーターのみなさんのおかげでシーズンだつたと思つています。でも今年は年齢が若い選手に責任の自覚があつて、かつ自信を持ってプレーをしているなとは思つています。最初の頃はなかなか勝てなかつたんですけど、夏に入って安定してきて失点も少ないです。チャンスの数は以前より格段に増えていると思うので、かなり良くなつてきていると思います。  
攻撃の練習に多くの時間を割いていることが徐々に力になっているのかな、というのを感じています。点がなかなか入らない時期もありますが、それは前だけの問題ではなく、うしろの選手も質を上げたりチャンスの数を増やす作業が大事で、それが練習をたくさんすることによってだんだん質が上がつてきていることを感じています。  
勝つてくるとスタイルを変えたりするチームもありますが、今は継続することが強くなつていく道だと思つています。監督もそういう風に言ってますし、コーチ陣もそういう練習をしてきている。ぼくら選手はそれをしっかりと表現出来るようにやつていければと思います。

ぼくもベテランと言われる年齢に入ってきていますけど、若い選手に負けるわけにはいかないという切磋琢磨の結果としていいチーム状態になつてきていると思いますし、誰が出て同じようなサッカーが出来るのはいいですね。  
シーズンの半分が経過してボールを奪いに行く姿勢がよくなり、競り合いでも主導権を握つて出来ていると思うので、攻撃でも守備でも、自分たちから積極的に仕掛けていく姿勢を観ていただきたいですね。



Shinya KAWASHIMA

川島さんはコーチとして横山選手を見ていた立場ですが、どんなアプローチを。  
 川島 ユースの選手が必ずトップに上がれるというわけではないんですけど、でもその可能性は示してあげないといけない。トップに上がれる、上がれないというのは、クラブの強化部長だったりそういうセクションの人們が決めることなので、常に評価されるように心がけないと上には行けないよ、ということば伝えていました。  
 「ふたりともユース年代では道が違ったわけなんですけど、大学サッカーに進んだところには共通点があります。大学の選び方についてはどう考えていましたか。  
 羽田 岐阜に戻るといって選択肢もあつたんですけど、岐阜に戻って、プロを目指して、プロになれないと思った時に、自分の中で後悔が生まれるかもしれないと思つたんです。大学の各リーグで一番レベルが高いと言われているのが関東大学リーグだったんですけど、どうしても関東でやりたい、と。関東に行つてプロになれなかったらもう仕方がないと思つて、桐蔭横浜大学に飛び込みました。  
 横山 自分も関東とか、そういうレベルの高いところでやるのがいいなと思つてたんですけど、岐阜だと実家暮らしになりますし、経済的な面のメリットも含めて岐阜協立大学を選びました。生活もあまり高校の時と変わらなかったんで、そこは良かったかなと思います。

川島さんはトップチームの選手からFC岐阜U-18のコーチとして指導者の道に入ったわけですが、当時のアカデミーにはどんな印象がありましたか。  
 川島 ぼくが現役選手だった時代はセレクションでライオンズマンとして巧いから獲得するとか、そういうレベルでした。それに比べたらすごく発展しているなつて思いましたね。短期間で質が上がったと思います。特にこの羽田一平選手や横山智也選手の世代にはいい選手が多くて、FC岐阜SECONDにも3人くらい輩出しているんですけども、やっぱり選手が入ってくるレベルになってきたんだなという感慨がありました。  
 「ふたりがFC岐阜U-15に通おうと思つた理由は何？  
 羽田 自分は、ひとつには小学校の時に、岐阜の中である程度有名で、その世代のトップでやっていた子たちが集まると聞いてたので、そういううまい子たちが集まる場所だと思つたからですね。それが理由としては強いかもしれない。  
 「そういう口コミは横山選手にも伝わっていましたか？  
 横山 自分も一平と同じで、知り合いがセレクションを受けるっていう話を聞いて、そこで初めてFC岐阜アカデミーの存在を知つたんですけど。そうやってプロを間近に感じられる場所だサッカーが出来るといことはすごく魅力的に感じました。  
 羽田 自分たちの一学年上になかなかパンチのある人たちがいたんですよ。面白そうだなと、感じてはいました。  
 横山 でも一番の理由は友達が行くから、ということが大きいですね。  
 「同世代での自分たちのレベルはどう測つていました？  
 羽田 それが一番わかりやすかつたのは小6の時のトレンセンですね。いろいろな全国の子たちがいるところで「ああ、全然レベルが違うな(苦笑)」と感じて。そういうレベルを一番感じられる場だったなと思います。  
 横山 そういう声は聞こえていました。大学とFC岐阜が近く、けっこう試合も観てくれるんだなと思つていましたし、練習試合で直接対戦することもあったので。  
 「今こそ大学サッカーが育成の最終段階みたいになっていますが、実際に大学を経てアカデミー卒の選手がクラブに戻ってきた実例を目的にしたりしてどのような気持ちですか。  
 川島 アカデミー出身の選手が岐阜でプロになるというのは、ひとりいます(石坂亮人)けど、なかなかかつたことなので、嬉しさでいっぱいなんです、やっぱりこのレベルまで来たんだというのが正直なところなんです。FC岐阜に戻つてきてくれるということは嬉しいんですけど、岐阜でなくともアカデミーの選手がプロになるということはこちらとしても嬉しく、欲を言えばJ1、J2にアカデミー出身の選手がいる状態になればいいですけど、アカデミーからプロになる選手が増えていく過程で、こういう選手たちが出てきたのは嬉しいですね。  
 「天皇杯3回戦のアビスパ福岡戦では羽田選手がプロでの初ゴールを決め、横山選手もこでの出場をきっかけにリーグ戦デビューするなど、初年度から活躍が目立ちますか。  
 川島 ぼくも福岡戦を観に行つてたんですけど、アカデミーの選手同士の交代(後半6分、羽田→横山)で「なんか嬉しいな。こんなことがあるんだな」と思つていました。石坂もそうですけども、試合にも絡んでいきますし嬉しいんです。今後はレギュラーとして定着するように、もっともっとやっつてほしいと思います。  
 「自分たちとしてはこのくらい出来て当たり前なのか、もっと出来るのか、どんな気持ちですか。  
 羽田 自分はまだまだ、全然だなと思つてます。開幕スタメンのあたりは出なかつたので、今はベンチを外れている。やっぱり大学とプロの違いは感じますし、大学まで試合に出られて当たり前だったんですけど、定着する難しさをすごく感じてますね。

FC岐阜 U-15監督 川島 眞也氏 × 26 DF 羽田 一平選手 × 27 FW 横山 智也選手 SPECIAL TALK スペシャルトーク



U-15監督川島眞也氏、羽田一平選手、横山智也選手が語る アカデミー発大学経由トップ行きの10年と、FC岐阜のこれから

川島 今に至るまで岐阜のトップから10番目までの子は県外に行く傾向がありますね。そういう状況でもこの代はみんないい子が入つてきてくれたという印象です。この年代の子はみんな技術的に巧いな、というのがあります。小さい子もいけば大きい子もいるんですけど、おしなべて巧い子が揃つたなと感じました。ほかの世代とは違うというのは明らかでした。  
 「その世代でのトップクラスまではやつてこないですか。  
 川島 今に至るまで岐阜のトップから10番目までの子は県外に行く傾向がありますね。そういう状況でもこの代はみんないい子が入つてきてくれたという印象です。この年代の子はみんな技術的に巧いな、というのがあります。小さい子もいけば大きい子もいるんですけど、おしなべて巧い子が揃つたなと感じました。ほかの世代とは違うというのは明らかでした。  
 「その辺の力関係の相手感というものは、選手の立場ではどうでした？  
 羽田 それがいちばんわかりやすかつたのは、クラブユース選手権(U-15)とかの対外試合に出てグランプラスとやつた時ですね。それで対等に出来た時は「ああ、自分たちは同世代のトップレベルと戦えるな」という感覚になりました。それは自分たちが実際にそういう相手と戦わないとわからなかつたですね。自分の中ではそういう県外のチームと戦える時が、力を確かめられる場だつたなと思います。  
 横山 ぼくは小6の時には全国大会(全日本少年サッカー大会。現在は全日本U-12サッカー選手権大会)に出場して、県内では敵なしという感じでした。  
 「FC岐阜U-15の主力だつた羽田選手は高体連のサッカー部に進みましたが、県内の優秀な選手が県外に流出して寂しくはなかつたですか。  
 川島 それは選手自身が決めることなので、進みたい道を進めばいいと思います。ただ、またこうやって戻つてきてくれるというのは非常に嬉しいですし、ユースに上がらなかつたからと言って、変な思いはないですね。高校の先生方にもジュニアユースを今でも見に来ていただいていますし、それも羽田選手であるとか先輩たちの実績があるからこそだと思います。  
 「羽田選手は進路選択をどう考えていたんですか。  
 羽田 自分もともと県外でやりたいという志向が小学校の頃からあつたので、ユースに上がることも出来たんですけど、高校サッカーとか県外でやりたいという意思をクラブにはしっかりと伝えてきました。今こそJリーグに大卒プロの方が増えてきていますけど、自分たちが高校に進学した時は、まだ高卒プロの方が多かつたですね。だから高校でしっかりと結果を残して、高卒プロで、というキャリアを思い描いてたんですけど、そんなに簡単な話ではなく、高卒でプロというのは無理だなと思つたのが高2くらいで。もうその頃になると大卒のプロ選手が即戦力で活躍するケースがJリーグに多くなつてきたので、大学に行くという選択肢もアリだなとは、その時に思い始めました。  
 横山 ぼくがFC岐阜U-18に昇格したのは、プロになるチャンスが高校サッカーよりもあると思つたというの理由のひとつでした。ユースからトップチームに昇格することを目標にしてやつていましたね。



Ipppei HADA

その世代での自分たちのレベルはどう測つていました？  
 羽田 それが一番わかりやすかつたのは小6の時のトレンセンですね。いろいろな全国の子たちがいるところで「ああ、全然レベルが違うな(苦笑)」と感じて。そういうレベルを一番感じられる場だったなと思います。  
 横山 そういう声は聞こえていました。大学とFC岐阜が近く、けっこう試合も観てくれるんだなと思つていましたし、練習試合で直接対戦することもあったので。  
 「今こそ大学サッカーが育成の最終段階みたいになっていますが、実際に大学を経てアカデミー卒の選手がクラブに戻ってきた実例を目的にしたりしてどのような気持ちですか。  
 川島 アカデミー出身の選手が岐阜でプロになるというのは、ひとりいます(石坂亮人)けど、なかなかかつたことなので、嬉しさでいっぱいなんです、やっぱりこのレベルまで来たんだというのが正直なところなんです。FC岐阜に戻つてきてくれるということは嬉しいんですけど、岐阜でなくともアカデミーの選手がプロになるということはこちらとしても嬉しく、欲を言えばJ1、J2にアカデミー出身の選手がいる状態になればいいですけど、アカデミーからプロになる選手が増えていく過程で、こういう選手たちが出てきたのは嬉しいですね。  
 「天皇杯3回戦のアビスパ福岡戦では羽田選手がプロでの初ゴールを決め、横山選手もこでの出場をきっかけにリーグ戦デビューするなど、初年度から活躍が目立ちますか。  
 川島 ぼくも福岡戦を観に行つてたんですけど、アカデミーの選手同士の交代(後半6分、羽田→横山)で「なんか嬉しいな。こんなことがあるんだな」と思つていました。石坂もそうですけども、試合にも絡んでいきますし嬉しいんです。今後はレギュラーとして定着するように、もっともっとやっつてほしいと思います。  
 「自分たちとしてはこのくらい出来て当たり前なのか、もっと出来るのか、どんな気持ちですか。  
 羽田 自分はまだまだ、全然だなと思つてます。開幕スタメンのあたりは出なかつたので、今はベンチを外れている。やっぱり大学とプロの違いは感じますし、大学まで試合に出られて当たり前だったんですけど、定着する難しさをすごく感じてますね。

自分も今まで試合に出て当たり前前のサッカー人生だったので、最初に出れない時期が長かつた時は苦しかったんですけど、それでも自分に来ること毎日やるうって思いますがやっています。そのうえで、天皇杯でいいパフォーマンスをしてそのままリーグ戦にも絡めるようになってきたというのは、ちょっと自信になりました。  
 川島 プロになる選手は高校や大学でレギュラー、試合に出て当たり前前の選手であるわけで、それ以上の選手たちを越えていくには人と同じことをやっていたらダメだなと、それは引退してから思っていました。現役時代にもつとやっておけばよかったんですけど、後悔しきりです。一番早くグラウンドに行つて一番遅くまで残っている、あるいは自分より上手な人たちがいる、たくさん走つたり、切り替えをすばやくするとか、そういうところで勝つていかないと上には行けない。みんな巧いことは巧いので、プロの中でどう抜き出ると言ったら、自分にあつてもうちょっとの無理をきかせる、そういうことでの必要性を感じます。  
 羽田 もう、今仰つた通りで、本当にもう、そのまんまです。やっぱりプロになったら、どれだけ自主練習しようが、外で努力しようが、ピッチでしか表現が出来なくて。ピッチの中で表現して結果を残さないと上からは評価されないんで、努力は大事ですけれど、



Tomoya YOKOYAMA



その努力をどれだけピッチに出せるかがやっぱりプロだと思います。やってみるぞと思つても空回りしちゃうし、だから今、自分的には初めての感覚なので、すごく成長出来ていると思います。  
 横山 今、試合に出られている人たちが差があるから自分が出られていないわけで、その人たちがどういうプレーをしているのか、自分との差はなんなのか、そういうことを考えながら、今、試行錯誤しながらやっています。  
 「10年以上のスパんでクラブと歴史を共有しているお三方ですから、今後のFC岐阜についても考えるところがあると思います。最後に一言ずつ。  
 川島 ぼくは毎年ひとりをトップ昇格させたい、と思つてますけど、それをやるには10年かかつたわけですが、これからは毎年上げて、これが当たり前になるようにしていきたいです。  
 羽田 自分は選手で、ピッチでしか表現出来ないんですけど、ピッチで結果を残して、まずは岐阜のJ2復帰をめざさないとダメだと思つています。高い壁があつて難しいですけど、自分がピッチに出て目標を達成することが、岐阜を一番盛り上げることになると思うので、試合に出て、結果を残して、J2復帰と、一つひとつ段階を踏んで岐阜を盛り上げていきたいなと思います。  
 横山 FC岐阜の選手としてまずはJ2復帰しないとダメですし、その次のJ1まで目標にしていきたいです。岐阜出身の選手として、試合で活躍して岐阜を盛り上げたいですし、岐阜の子供たちにも憧れや夢を持ってもらいたい。そこを目標にしてやっしていきたいなと思います。  
 Hidamari Cafe  
 住所：岐阜県岐阜市東端 3-59  
 TEL：080-3700-5177  
 営業時間：9：00-16：00 (L.O.15：30)  
 定休日：無し



# 野崎信行コンディショニング・スーパーバイザーの「思いとどませる信念」

コンディショニング・スーパーバイザー 野崎 信行氏



## ● アクセルとブレーキの役割

プロサッカークラブは試合に必要な登場人物である選手と、その選手たちを支える人として成り立っています。おもしるいは、支える人が選手の活動に対してアクセルとブレーキの役割に分かれ、常にバランスをとっていることです。クラブにとって選手は大切な資本です。ホームタウン活動も含めて地域やクラブに貢献してもらうには、トレーニング、休養、回復といったサイクルを回して良い状態をキープしなくてはなりません。そのためには、プレーを見るテクニカルスタッフとコンディショニングを見るメディカルスタッフそれぞれがアクセルとブレーキを交互に担い、適切に負荷をかけて選手の魅力や能力を引き出していくことが重要です。

浦和レッズで「ゴッドハンド」の異名をとった野崎信行コンディショニング・スーパーバイザーは、いわゆるトレーナーに分類されます。しかしケガを予防する観点から、FC岐阜ではフィジカルに関する練習メニューの設定に取り組み、フィジカルコーチ的な分野にまたがる仕事をしています。言わば、ブレーキ役がアクセルの調整までをおこなっているような独特な仕事ぶりになります。

## ● MSC+STRENGTH

東洋医学の鍼灸マッサージに精通し、日本体育協会のアスレティックトレーナーという資格を持つ野崎さん。サッカーに関する仕事では、名古屋グランパスではマッサージ専門だったが、浦和ではリハビリを担当するようになり、また岐阜ではマッサージもやればリハビリもやり、あらゆることを横断的にこなす役割。そのためコンディショニング・スーパーバイザーという役職名にして、選手の身体をまるごと把握し、面倒を見る立場をとっています。重視しているのはケガの予防で、そのため、週の前、全選手を対象にMSC+S [Mobility(可動性)Stability(安定性)Coordination(協調性)+Strength(強さ)]と「フットレーニンング」を実施しています。

「MSC+Sは浦和時代に始めたことです。ケガをした選手が復帰できるように治していくことをメイン業務としてやっていたんですけど、ふと、そもそもケガ人が出ないほうが良くないか——、思い直したんです。もともとは、リハビリをしていく選手が競技に復帰する前に、どの程度快復しているかを確かめるものなんです。これを、ケガをしていないとされる選手に実施すると、そのチェックに引っかかり、実はケガをしていたことが明らかになったりするんです。サッカーはすごく激しい競技ではあるのですが、思った以上にごまかせる。競技なので、潜在的なケガ人がいる。その選手たちを浮かび上がらせて、ケガに至る前に予防するということが主眼ですね」

## ● 支えるというスタンス

プロサッカー選手は舞台俳優のようなもの。表現をする選手を支える立場であることが、野崎さんに向いている生き方であるようです。

「ぼくはやっぱり主ではないんだらうなという気はしますね。健康な選手でも毎日マッサージ、ケア、トリートメントはするので、やはり選手全員の元気な状況維持するという仕事メイン。だから選手たちがちゃんとプレーをしていてくれる姿を見ることが喜びです。支えるというスタンスがぼくには向いているんだらうなと思います。『健全な肉体に精神が宿る』と言いますが、ケガをすれば気持ちも落ちるといった波は、サッカー選手のほうが一般の方よりは大きいと思います。だからこの手で出来る限界はあるんですけど、選手たちがサッカーを出来る状況



手に復帰出来るように治していくことをメイン業務としてやっていたんですけど、ふと、そもそもケガ人が出ないほうが良くないか——、思い直したんです。もともとは、リハビリをしていく選手が競技に復帰する前に、どの程度快復しているかを確かめるものなんです。これを、ケガをしていないとされる選手に実施すると、そのチェックに引っかかり、実はケガをしていたことが明らかになったりするんです。サッカーはすごく激しい競技ではあるのですが、思った以上にごまかせる。競技なので、潜在的なケガ人がいる。その選手たちを浮かび上がらせて、ケガに至る前に予防するということが主眼ですね」

## ● F1のピットクルーみたいな感じ

肉体を鍛え上げ、技術を磨き上げたプロサッカー選手は一種の芸術品であるとも言える。それが、ピッチ上ではアドレナリンが出て少々出血していても気にならないほどの激しさでプレーする。闘争本能が刺激される試合の場ではいつ、なにか負傷してもおかしくなく、実際に負傷は絶えず発生するものとなっている。そのケガ人を治療し、プレー出来る状態にして復帰させるメディカルスタッフを、野崎さんはF1のピットクルーに喩える。

「F1のピットクルーみたいな感じだと思っていただければ。選手のタイヤが摩耗してダメだ、ピットに帰ろう。はい、ガソリンを補給して。そういうことを日々やっている感じですね。あるいはガレージのメカニックだと言ってもいい。プロサッカー選手もトップアスリートなので、一般人よりは繊細なんです。聞いたところでは、F1カーはリアウィングの角度が1度、2度ちがうだけで、空気の抵抗で地面に押し付ける力、いわゆるダウンフォースが変わり、簡単にスピニングしてしまうらしいですよ。馬力がある選手たちも打撲しただけで、ちょっと使えない部分が生じると、それがケガリスクにつながってしまう。パンクというケガに。だからクラッシュをみたくないんですよ。それがケガだと思っただけで、それが出来ないように日頃おこなうテスト走行が、毎週実施しているMSC+Sに当たるんです」

ドライバーはタイヤが減っていたとしてもごまかして走りたい生き物。けれども、ピットとしてはすり減ったツルツルのタイヤで走るとは事故につながるから、絶対に交換させる。ケガをする前に選手を思いとどませるというかたちで、選手を支える。それが野崎さんの生き方であり、チームへの貢献の仕方だと言います。



# 天皇杯 JFA 第103回 全日本サッカー選手権大会

## 結果報告

1 回戦

2023.5.20 SAT 13:00 KICK OFF  
会場：岐阜メモリアルセンター長良川球技メドウ

FC岐阜	2	0 前半 2 後半	0 1	1	新潟医療福祉大学 (新潟県代表)
得点		3 SH	6		
ンドカチャールス 71分		7 CK	7		
藤岡 浩介 88分		14 FK	6		

新潟医療福祉大学との好ゲームを制し、2回戦進出！  
試合は、71分にンドカ チャールス選手が猛烈なチェイスで先制点を挙げ、さらに88分には藤岡浩介選手が劇的な勝ち越しゴールを決め、FC岐阜が2-1の勝利で試合終了を迎えました。



2 回戦

2023.6.7 WED 19:00 KICK OFF  
会場：IAIスタジアム日本平

FC岐阜	2	0 前半 1 後半 1 延前 0 延後	0 1 1 0	1	清水エスパルス (J2)
得点		4 SH	16		
田口 裕也 75分		4 CK	8		
北 龍磨 103分		20 FK	29		

天皇杯2回戦はJ2清水エスパルスと対戦。試合は延長の末、FC岐阜が勝利！  
後半75分田口裕也選手が得点し、さらに103分には北龍磨選手が追加点を挙げ、試合は2-1でFC岐阜が勝利し、3回戦進出を果たしました。



3 回戦

2023.7.12 WED 19:00 KICK OFF  
会場：岐阜メモリアルセンター長良川競技場

FC岐阜	1	1 前半 0 後半 0 延前 0 延後	0 1 0 1	2	アビスパ福岡 (J1)
得点		8 SH	23		
羽田 一平 39分		3 CK	10		
		12 FK	20		

J1アビスパ福岡との3回戦、試合は延長戦の末、1-2で惜しくも敗戦となりました。前半39分に羽田一平選手の先制点でリードするも、後半同点に追いつかれ、延長後半115分に失点。試合は1-2で敗戦という結果になりましたが、J1相手に粘り強い試合で、リーグ戦に期待できる試合内容でした。



# オレンターノツアー報告

天皇杯 JFA 第103回全日本サッカー選手権大会 2回戦

2023年6月7日(水) 19:00 KICK OFF  
vs 清水エスパルス(J2)  
会場：IAIスタジアム日本平

試合結果 **WIN** FC岐阜 2 - 1 清水エスパルス  
旅行代金 (大人・小人同額) 後援会員10,000円/一般12,000円  
参加人数 21名



2023明治安田生命 J3リーグ 第17節

2023年7月9日(日) 15:00 KICK OFF  
vs 奈良クラブ  
会場：ロートフィールド奈良

試合結果 **LOSE** FC岐阜 0 - 1 奈良クラブ  
旅行代金 (大人・小人同額) 後援会員6,000円/一般8,000円  
参加人数 72名



# 地域貢献活動

FC岐阜はJリーグ参入以来、地域貢献活動としてホームタウン活動を積極的に行い、地域に貢献してはならない存在となっております。  
またホームタウン活動はSDGsとも親和性が高く、特に「3.健康福祉」「4.教育」などを中心に17目標の内、9目標に取り組んでいます。  
2022シーズンのホームタウン活動(地域貢献活動)は470回と、Jリーグ全体でも上位の実施回数となっております。

## Jリーグ社会連携活動(シャレン！)

### ◆Be Supporters (Beサポ)

FC岐阜では高齢者施設にクラブスタッフがお伺いし、簡単な運動や頭の体操、レクリエーションなどをおこなう体操教室を年間約50回おこなっております。  
この体操教室は、年齢に関係なく運動への関心を高め、身体機能の維持向上、日常の生活を生きやすく楽しくすることを目的としています。

今年から始めたBe Supporters(通称Beサポ)とは、高齢者施設に入所されているシニアの皆様は、サッカーの応援を通じて、コロナもカラダも動かしてもらおうという参加型プロジェクトです。

第一弾としては、今年6月に選手9名が体操教室に参加して高齢者の皆様と交流し、一緒に楽しく体操をさせていただきました。

第二弾では、岐阜県内23の高齢者施設からクラブや選手へ応援メッセージを341筆いただき、集まったメッセージを横断幕にしました。

できた横断幕は選手のロッカールームなどに掲出し、選手に皆様の熱い想いを届けさせていたたくともに、9月9日 vs 宮崎のホームゲームではシニアの方に実際に選手が入場する花道にお越しいただき、横断幕を掲げ熱い声援を送っていただくことができました。

これからもBeサポを通じて、シニアの皆様がより元気になるお手伝いを積極的にこなしてまいります。



選手がお届けし、子どもたちと交流!

### ◆フードドライブ

ホームゲーム会場にて(株)パローホールディングス様と毎試合フードドライブを実施しております。

回収した食品は岐阜県社会福祉協議会「子どもの居場所センター」をとおして必要としている人のもとへお届けし、食品ロスの削減、また持続的な地域社会に貢献しています。

8月には選手2名がホームゲームで集めた食品を子ども食堂へお届けし、施設を利用する子どもたちと交流しました。

※フードドライブとは、家庭で必要なくなった食品をご持参いただき、地域のパートナー(社会福祉協議会、フードバンク、子ども食堂などの団体)のもと支援が必要な方にお届けする活動のことです。

地域の課題や共通のテーマに対し地域・行政学校などと連携して取り組む社会連携活動(シャレン!)に今後も取り組んでいきます。ぜひFC岐阜に依頼したいことや一緒に取り組みたいことがありましたら気軽に声を掛けください。

FC岐阜ホームタウン活動担当: 058-233-1681



シニアの皆様による選手入場花道



選手による高齢者施設訪問

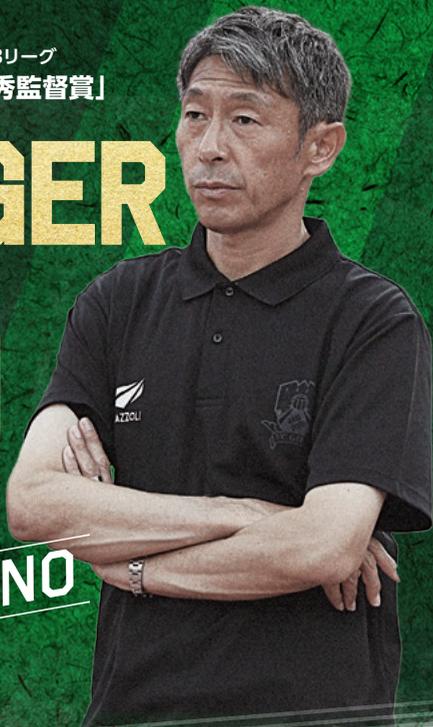
## Congratulations



2023明治安田生命J3リーグ  
6月度「月間優秀監督賞」

MANAGER  
OF THE  
MONTH  
JUNE 2023

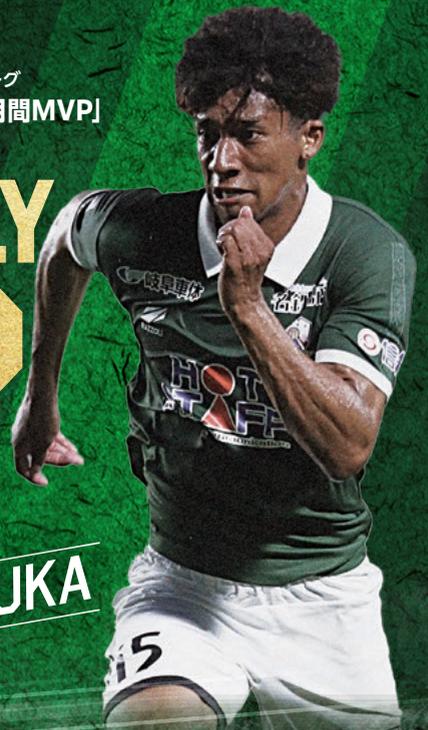
YUSAKU UENO



2023明治安田生命J3リーグ  
8月度「KONAMI月間MVP」

MONTHLY  
MVP  
AUGUST 2023

CHARLES NDUKA



FC岐阜後援会  
観戦体験チケットを使って  
スタジアムで応援しよう!

HOME LAST 3 GAMES

第34節 11.4 SAT 15:00 KICK OFF  
VS ヴァンラーレ八戸

第35節 11.12 SUN 14:00 KICK OFF  
VS カタマール讃岐

第38節 12.2 SAT 14:00 KICK OFF  
VS ギラヴァンツ北九州

後援会への入会・その他お問い合わせ先

FC岐阜後援会事務局  
〒502-0817 岐阜市長良福光2070-7 長良川スポーツプラザ1F  
TEL 058-233-2877 FAX 058-295-7866 e-mail:kouenkai@fc-gifu.com